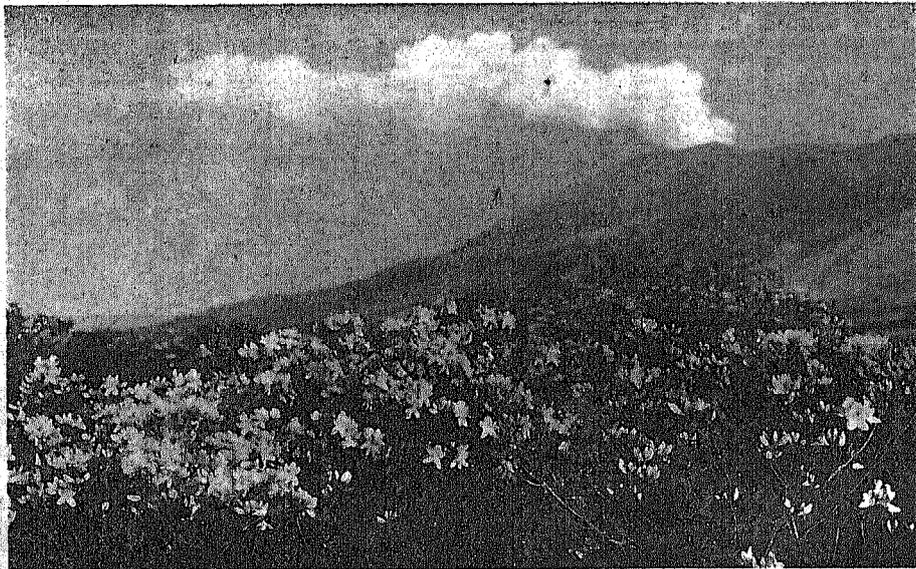


報會曲千

日十三月四年六十和昭

號 四 第

會曲千人法圖社



目次

- △表紙 陽春麗花薫る浅間山麓……………(一)
- △遠藤保太郎教授退官……………(二)
- 遠藤教授を送る……………井上 柳梧
- 惜別の情に堪へず……………佐藤 利一
- 遠藤先生を送りて……………佐藤春太郎
- 遠藤先生の御退官を惜む……………浦生俊興
- 鮮かだつた遠藤先生……………山口定次郎
- 遠藤教授の著書、報文……………(三)
- △敍任辭令……………(四)
- △細川助教授榮轉……………(五)
- 細川助教授を送る……………奥 正巳
- △デューボン氏のフアイバーDの發表……………(六)
- △第廿八回卒業證書授與式……………(七)
- △昭和十六年度入學許可書……………(八)
- △母校便り……………(九)
- 實業教育振興會章、針塚章授與……………(十)
- 「ちくま」第三十七號發刊……………(十一)
- 滑空班活動準備進む……………(十二)
- 教務課長、圖書課長移動……………(十三)
- 學生、樂團作業指導者訓練を受く……………(十四)
- 生活部購買班の活動……………(十五)
- △本會記事……………(十六)
- △支會通信……………(十七)
- 静岡支會總會の記……………(十八)
- 朝鮮春の便り……………(十九)
- 軍隊生活斷片……………(二十)
- 破帽生……………(二十一)
- △計……………(二十二)
- 弔慰金募集……………(二十三)
- 弔慰金報告……………(二十四)
- 故佐谷戸健次郎氏の英靈を弔ふ……………(二十五)
- 浦生 俊興……………(二十六)
- △會員動靜……………(二十七)
- △新卒業生就職先……………(二十八)
- △指定旅館案内……………(二十九)

遠藤教授御退官

遠藤先生の御經歷

明治二十年十月十五日生

春花まだき三月の始めに遠藤先生の嚴父殿の御凶報を御傳へ申上げて間もなく、本誌編輯子は自分の郷里伊那に於て突然先生御退官の御決意を耳にしたのである。そして四月一日には先生始め御家族の皆様を上田驛頭に御送りして永い訣別をしたのである。

その去り行く姿の餘りに鮮かで、且つはあつげなく、思へば先生にまつて上田の地は先生の思出の地であり、亦學校としては學界、業界に對しては名實共に備つた一つの大きな看板であつた。惜別の情は更に禁じ得ないものがあると思ふ。本誌は此所に有志の御贊同を得て先生の記事を掲げ、先生多年學校、學界、業界に竭された御功績を偲びて會員一同と共に先生の御退官を惜み、越路の閑居に餘生を送らるゝ先生並びに御家族様方の未永く御健康の程を御祈り申上げたいと思ふ。



遠藤教授の官職を惜まざる

- 明治廿八年三月新潟縣立長岡中學校卒業
- 同四十二年七月第三高等學校卒業
- 同四十五年七月東京帝大理科大學卒業
- 大正四年七月 東京帝大農科大學卒業
- 同 六年四月 上田蠶絲專門學校講師囑託
- 同 十二年四月 紋高等官七等
- 同十二年十二月 桑樹學、植物生理學研究の爲め滿二年間獨佛米に留學
- 同十四年六月 農學博士授與さる
- 同十五年二月 歸朝
- 昭和四年七月 紋勳六等授瑞寶章
- 同 九月 文部省視學委員
- 同十二年八月 紋從四位
- 同十三年八月 勅任官待遇
- 同 十二月 紋勳四等授瑞寶章
- 同十六年三月 陸紋高等官二等

遠藤教授を送る

井上 柳 梧

我校開校以來三十有餘年此長き我校の歴史を作られたる數々の先生。我校をして磐石の重きを爲さしめたる其基礎を作られたる數々の職員程我校に取りて尊いものは無い。是等の職員が追々學校を去られる事程我校に取りて損失の大なるものは無く又此時程寂漠を感じずるものはない。先きに我校は針塚先生を送りて尙ほ幾何も無きに今日又遠藤教授を送るに到つたのである。是れ果して宿命である。然し實に惜別の情に堪えない次第である。

遠藤教授は大正四年七月東京帝國大學、農科大學を卒業されて同年四月我校に講師として赴任され、後大正六年に教授に任ぜられたのである。同教授は東大理科大學植物學科を卒業せられ、更に農科大學を卒業されたのである。即ち理論と實地とを合せ修得せられたのであるから、裁桑學の研究には全くの適任者である。殊に同教授は植物の栽培には非常に趣味を持つて居たのであるから此上も無い適者と言はねばならぬのである。

同教授が生徒を導かるるや非常なる熱心で以て自ら足袋脚絆を着けられ鐵を取りて先頭に立つたのである。尙ほ博覽強記にして雜草の名稱其性狀に通じ實習の間に是等に就きても詳しく教へたのである。同教授の研究は年と共に益々進展し遂に總括されて現はれたのが日本桑樹栽培論である。當時我國に於ては桑樹に關する研究は洵に寥々たるものであつたが、本著の出現によりて桑樹栽培に關する試験研究其他桑樹に關する事項が統一せられ、系統建てられ學問的形態を備へるに到つたのである。大正十二年十二月に桑樹學及植物生理學研究の爲め滿二年間獨逸、佛蘭西及北米合衆國へ留學し一層研鑽を積み、留學中大正十四年六月農學博士の學位を授けられ大正十五年二月歸朝せられたのである。其後

益々研究を進め桑樹學に關して威權として業界より尊崇の的となり、我校名も同教授によりて蠶絲業界に高くなつたのである。同教授は授業、研究の暇に絶えざる努力によりて桑樹實驗法、桑樹病理學及裁桑學通論等名著を次ぎ次ぎに著し蠶絲業界を指導し利せられたる事は實に莫大なりと謂ふ事が出来る。最近に桑樹のザイルス病に關しても又大に研究を進められ多くの實績結果を得られつゝあつたのである。教授は朝顔及菊の栽培には非常な妙を得られ毎年見事なる作を陳列せられて人々を喜ばしめられたのである。尙ほ之れに就きても著書がある。

本年三月同教授の嚴父突如逝去せられ同教授は家事繼承の爲め歸國せらるゝの已むなきに到つたのである。

教授は我校に在職せらるゝ事貳拾五年八月の長きに渡り養蠶科長より教務課長を轉じ我校の重鎮として要務を掌握されたのである。我校として教授を失ふ事は棟梁の一を失ふ事になるのである。茲に於て教授の辭意を知るや我校の爲め更に又學界の爲め反省を乞ひたるのであるが、其の決意固くして齟す事を得なかつたのである。

四月一日午前十時四十四分上田發下り列車にて同教授は家族一同と共に出發さる。同教授の離別を惜みて送る人上田驛を埋む、誠に盛であつた。是れによるも教授の徳望の如何に高かりしを追想する事が出来る。終りに同教授並に御家族の御多幸を祈る次第である。

住みなれし上田を後に

君は今ふるさととして

惜しく出立つ

袂別の言葉はいとも短かきも

惜しむ心は測り知らまし

惜別の情に堪へず

佐藤利一

一河の流れを汲み一樹の蔭に宿るも是皆他生の縁とかや、況してや過去去實に二十五箇年間同じ學びの庭に兄と呼び、友と呼ばれての樂しかりし昔の思出其懐しき兄遠藤保太郎博士今何處、博士は既に本年三月限りで上田市内新田のあの二階建庭前コンクリートの大きなフレイムのある、あの御住居には居られなくなつた。

博士は此四月一日に半生の間住みなれし上田の地を離れ御家族と共に御郷里長岡市外深才村の御實家に引上げられたのである。

僕は過去の一生を顧みて涙涙共になり別れの言葉に窮して殆ど語せなかつたことが三度ある。其中の一つは此度の我養蠶科職員の時藤博士送別茶話會に於ける送別の途程の際であつた、言葉の途中に胸に浮び出づる數々の追憶、此會場三號蠶室の宿直室に博士を迎へて團樂の樂しみを味ふも今日限りかと思へば惜別の情抑へ難く感極まつて心も麻痺して了つたのであつた。我養蠶科職員一同が傳統的に常に和衷協力の實を示し、假令意見の對立を見るが如き場合があつても感情の對立を見ることは絶對に無いが、これは遠藤博士の如き圓滿福徳の人格者の感化に由るものである。博士は如何なる場合にあつても口角泡を飛ばして人と争ふ様なことはされなかつた。時に甚だしき意見の相違のある場合と雖も和らかりき言葉で談笑の間に克く意見の接近妥協點の發見を完遂されるのが例である。人には味方千人敵千人と云ふが博士の場合には只一人の敵もない、これは全く博士の徳の然らしむる所で博士の行動はすべて誠意の現れであり其處には何時も表裏が無く策動がましき點が微塵も無いためである。

遠藤博士の講義や講演は内容の充實整備調等極めて評判がよかつたが、それは博士の眞面目、親切研究的等の性格の反映であらう

授業の餘暇嘗つての養蠶科長や今迄の教務課長等の忙しい校務の傍にも孜孜として研究を怠らず、學位を獲られたのも本校に於てであらう。尚幾多貴重なる研究業績をも發表されて居る。我養蠶と桑樹病理學とに於ては我國最高の權威者であられることは既に公知の事實である。然るに尙蠶繭壯者を凌ぐ蠶繭の博士の引退を見るに到つたのは止むを得ざる御家庭上の事情に基づくものとは云へ、本校の爲には勿論學界の爲にも痛惜の限りである。遠藤博士の趣味には僕の趣味と同種のものが尠くない、諸曲然り、花卉栽培然りである。諸曲では二十數年來の友である。殆ど同時に入門し互に或はシテとなりワキ又はツレとなり、極めて仲よく講つて来たものである。博士は九番もの免狀を許される迄に大成された、斯道では博士夫人も亦夫君に劣らざるものならず其仕舞の技は拔群のもので、羽衣會三羽鳥の御一人である。博士の花弁栽培は朝顔、菊、サイネリヤ、シクラメン等が主で殊に朝顔と菊との栽培技術は上田同好會員中の横綱格であつた。其栽培技術の進歩は正に電撃的で入門後僅に一年にして早くも入幕し二年にして一躍横綱に榮進と云ふ目覚ましき上達であつた、此方面の同好者からも博士の當地引上げは非常に惜しまれてゐる。

博士の御家庭は稀に見る賢夫人倫子さんと間に三男三女を擧げられたが、いづれも秀才才媛揃つて羨望の的になつて居る。すべての角度から觀て理想的に幸福なる御家庭と云ひ得る。將來御一同益々御壯健で御家運の愈々隆盛ならんことを祈る。

終りに永年に亘る博士の過去の御友情並に御指導御援助を深謝すると同時に今後も尙幾らざる御交誼を御願する次第である。

遠藤先生を送りて

佐藤春太郎

遠藤先生とお別れして、なぜこれ程寂寥を

感ずるのか、我ながら不思議でならなかつたが、よく考へて見れば、先生と私とは、生れ故郷も同じ越後であり、又高等學校も同じ三高で、後亦同じ東京帝大農學部に學び、同じ此の上田蠶絲専門學校に勤めて、二十有餘年先輩として同窓として御指導を蒙りて居るうちに、いつの間にか兄上様の氣持になつて居た事が、此度お別れして初めて我ながら氣付いた様な次第である。私の最もよき兄弟である遠藤先生に就いて、思ひ出を書きよと云ふならば、到底限られた紙面では盡しきれぬ處である。

先生は其御専門方面で第一人者であられ、又圓滿にして多趣味であられた事は、誰も知る事だ、草花、盆栽方面の大家とも云ふ可き方であつたが、朝顔(此の御著書もある)や菊作りは、名人の域に達せられ、上田同好者の會長をされて居つた程であるし、畫は素人離れをして居られて、養蠶科標本室に陳列されてある精巧なる掛圖は、先生が御研究の餘暇を利用して、御描きになつたもので、常に參觀者の目を驚かして居る。此方面の事は他の方々がきつと書かれると思ふから、私は先生の諸曲に就いて述べる事にする。

私が此の學校に赴任して来た當時は(二十數年の昔となるが)上田蠶事では諸曲が非常に盛で、羽衣會を組織して職員多數もこれに参加せられ、斯道の權威者高橋先生を招聘して人に馬力をかけたものであつたが、長い年月の間に、いつの間か一人去り二人散して最後迄全うせられたのは、五指にも足りなく先生は(令夫人と共に)其うちの一人であられた(私などは勿論落伍者の筆頭でした)。

毎春舉行せられた高橋先生門下の諸曲大會には、第一入者針探先生、阿形先生と共に最終の出し物としての難曲を、美事誇ひぬかれ同好者の絶讃を拍されたものであつた。又養蠶部の若い職員方は、其婚禮披露の席上で先生の御祝言の諸曲で、錦上華を添へてもらつた事を忘れぬであらう。拙宅へも兩三度御出を願つて、講うていたいた事がある

が俊寛、鉢木等の情味は忘れられぬ思出である。只一つ困つた事があつた、それは御一緒にお能を見に行つた時の事であつたが、私ははやく痺れを切らして座を立ちたく、遠藤先生が出られたら私も一緒に出やうと、先生の方ばかり見て居つたが、先生にはいつかな動かうともなされず、これには困つたが然しこれ程御熱心なればこそ、あの様な堪能になられた事と感心した。

遠藤保太郎先生の御退官を惜む

千曲會理事長 蒲生 俊興

本邦蠶業學界の泰斗たる母校教授遠藤保太郎博士が御家庭の御都合上急に御退官の己むなきに到られたことは、母校は勿論本邦蠶業界の爲に甚しく惜しき極みである。先生は大正四年東京帝國大學農學部御卒業後間もなく、其の間約二十六年に亘る長年月の間あの明敏にして該博なる頭腦を以て桑樹の生理病理の各般に亘つて斷えず劃期的な御研鑽を遂行せられながらも極めて圓滿なる御人格と御造詣深き御知見とを以て、御在官中多數の同窓生がその御薫陶を仰いだことは吾々の生涯忘るゝことの出来ない所である。

殊に先生は獨り世界に於ける我養蠶の泰斗として尊敬の的であつた許りでなく、常に幾多の桑病の研究に専念せられ、社會に貢獻する所多大であつたことも亦周知の通りである此の意味に於て我母校の蠶絲界に於ける名譽確保といふ上から先生の御退官は實に惜しみても尙餘りある次第である。

尙先生には最近母校教務課長の重任を負

はれたるにも不拘、その寸暇を見て裁葉學に關する貴重なる不朽の名著を公にせられたばかりでなく、殊に御堪能なる花卉園藝に關し例へば大輪朝顔や菊花の栽培等に妙技を示され實に豊かなる御趣味の内に奥ゆかしい先生の御人格の躍動を拜することが出来たのである。

又先生が御著述を通じて吾が千曲會の海外留學資金等に多額の御寄與せられた事も吾等の誠に感激にたへない所である。茲に先生の御退任に際して會員一同を代表して謹んで感謝の意を表すると共に、先生御一家が愈々御健在にあられ永遠に母枝のため陰に陽に御指導と御鞭撻とを給はらんことを冀つてやまない次第である。

(四月十三日)

鮮かだつた遠藤先生

山口定次郎

遠藤先生の追憶を記すには餘りにも御退官が突然であり、日も浅いこととせばばらくは不思議な程に深刻な別離の情が湧き上らなかつた。きつとあの生物學教室へ再び温顔を見せて下さるに違ひないと思はれてならぬのだ。然し先生からの鄭重な御挨拶状を頂いたり、又本紙主筆から何か書くやうにと命合されて漸く色々の想ひがこみあげて来た。

先生が學徳共に稀に見られる高潔な方であることは私が茲に申すまでもない。良き家柄境遇に人と成られ、理想の家庭、高尚な趣味をもたれ、又公人としては卓越せる科學者或は教授として又各部署の名科長とし活躍せられた事等を私は最も良く存知してゐる一人であるかも知れないが、先生の全貌に就ては他の適當の方が記されると思ふので、私は學生時代から今日迄に終始篤き御訓誨をうけ御温情に浴した子弟の一人として、又雜誌編輯員の一人としての想ひ出を少し許り記して先生の偉徳を偲ぶよすがとすると共に今日迄の御厚情に對する感謝の微意を捧げたいと思ふ。

筆さばき敏さばき

先生の印象は本校入學試験の時、植物學問題で苦しみられたことにはじまる。あれから一年生二年生と、毎日植物學や植物病理學、農學等の講義や、植物實驗、圃場實習等と懇切に教授を受けた。先生の講義は實にノートし易かつた。難かしい生物學の諸問題を平易に講義して下さつた、吾々が生物學に異常の關心をもつ様になつたのも先生の感化によるものが大きいと時々想ひ出す。特に敬服を禁じえなかつたのは講義され乍らボールドへ無難作に畫かれた精巧なものでつた事である。見れば又無難作に拭消してしまはれるのが如何にも情しいものと思はれた。先生の論文や著書に接する人は誰しもその著者原圖の鮮やかさに感嘆せざるをえないであらう。今も養蠶部の標本室に十本餘り、桑の病菌の彩色圖が異彩を放つてゐるのはいささか記念である。又日本畫や寫眞等も能くされるのである。之はあまり知られてゐない、何れも藝術味豊かな美しい作品である。

先生は授業中にも又平常にも時々輕い皮肉や警句を發せられてはホッホッホと上品に口をスポメて笑はれるのが特徴である。

又圃場實習の時はスマートな細い足に紺の脚絆甲斐々々しく我々の先頭に先づ靴を云されたものだが此の姿は最近餘り見られなかつたその敏さばきの鮮かさや耻立ての美しさ等に到底眞似ることが出来ない、凡て先生の仕事は鮮かであつた。

「桑」と植物病理と遠藤博士

先生は農學、植物學何れも萬能であられるが、就中その著書「日本桑樹栽培論」樋口琢磨氏との共著——や、桑樹病理學其の他に見られる様に「桑」といへば遠藤博士であり、遠藤博士といへば「桑の病理學」を聯想される程に有名になつてゐる。講演行脚により日本各地にその足跡を残して居られることは一般の人々の間により多く知られてゐる位であらう。

新種の發見

先生が植物病菌の新種を數多く發見し、種の同定を行はれ之に夫々命名されてゐること、吾々の學生の頃から屢々耳にしてゐる所であつた。此の頃想出のまゝに先生の著書や手近い雜誌を開いて見て今更の様に感嘆して見何か寶石でも拾ひ取る様な思ひで摘録して見たのが別記の通り一五種に上つてゐる。之は取急いでの調べで充分でないかもしれないが判明次第訂正することとしよう。此の他最近には養蠶科長や教務課長の重職の傍ら、植物特別の方面で一人舞臺の觀があつた。今先生が此の御仕事を中絶されることは色々の意味に於て痛惜の極みであると思ふ。それにつけても先生の良き補助者であり共同研究者であられた樋口琢磨氏の早逝は返す返すも口惜しき極みである。

蠶絲學雜誌と先生

先生が陰に陽に千曲會の大恩人であられることは周知の事である。殊に私は蠶絲學雜誌編輯に携はつてゐるものとして、常に有難く思つておたことは先生の最近の論文はそれが何れも非常に貴重なるものであり、又もつと讀むには寄稿されずにはならず、千曲會の爲に蠶絲學雜誌へ御惠稿下さつたことである。その御後援によつて何れも御惠稿の價値が高められ研究者は啓發せられ、指導激勵されたか知れないと思ふ。此の御好意に對して改めて紙上存ら深謝の意を捧げるものである。

以上とりあえず先生の片鱗を記したにすぎないことを御断りする、先生よ失禮の點は御許し下さい。

遠藤教授の著書及報文

角のとれた温容裕かな先生の御性格は常に人を和げずに置かなかつた。その上高尚な趣味は側から見れば一寸並はづれた崇高さを覺ゆる程であつた。そして先生御自身の御研鑽の分野と相容れて、益々學術方面の蘊蓄を傾けられ學界に残された數多くの足跡は斯界を裨益するに餘りあるもののみにして、本誌はその一部を掲げて先生の御力闘を讃へたいと思ふ。

書名	頁數	年代
最新桑樹栽培學	六三三	一九二〇
實用栽桑講話	三二四	一九二〇
桑樹病理學	三三二	一九二〇
日本桑樹栽培論(樋口琢磨)	八六	一九二〇
桑樹實驗法	三二九	一九二〇
大輪朝顔栽培考	三五	一九二〇
日本蠶絲業史(栽桑史)六日本蠶絲學會	一九九	一九二〇
栽桑學通論	三二	一九二〇
桑樹栽培學汎論	三二	一九二〇
栽桑學教科書	三二	一九二〇
最新栽桑教科書	三二	一九二〇
同窓會發表のもの		
桑條の皮目數(宮島徳一郎、佐藤善衛)	二號	(一九二〇)
桑樹の耐寒性について	二號	(一九二〇)
桑樹發芽促進試驗(宮島徳一郎、佐藤善衛)	三號	(一九二〇)
桑の乳汁に就て	三號	(一九二〇)
桑苗摘葉の影響に就て(佐藤善衛、服部總作)	五號	(一九二〇)
桑の新病原菌二種	六號	(一九二〇)
繭繭及絹絲油燒に關する研究(樋口琢磨、石原石司)	八號	(一九二〇)
桑の細菌病に關する研究(附心止蟲及ハマダラバへの事に就て)	一〇號	(一九二〇)
蠶絲學雜誌に發表せるもの		
桑種子の發芽並に子苗の發育に及ぼす各種化學物質の影響(今村良樹)	一卷	(一九二〇)
桑樹の樹液流動開始測定法(山下忠雄)	三卷	一號(一九二〇)

遠藤博士の命名された植物病菌新種

- 桑の細菌病原菌……Bacterium moricolum Yendo et Higuchi
- 桑の煤病菌……Dimerosporium Mori, Yendo
- 全上……Meliola morifolia, Yendo
- 全上……Schenciella Mori, Yendo et Higuchi, nov. sp.
- 桑の擬似胴枯病菌……Fusicoccum Mori, Yendo, sp. nov.
- 全上……Valsa moricola, Yendo, n.sp.
- 全上……Macrophoma moricola, Yendo, n. sp
- 桑葉褐斑病菌……Septoria Kuwaecola, Yendo
- 桑の葉枯病菌……Hormodendrum Mori, Yendo
- 桑葉のエピコーム種……Epicoccum Mori, Yendo et Higuchi
- 全上(附)……Thyroccum Mori, Yendo, nov. sp.
- 桑葉の黄粉菌……Glomerularia Mori, Yendo, sp. nov.
- 桑葉の菌類一種……Coniothyria Mori, Y. Yendo sp. nov.
- 桑の粘菌……Plasmodiophora mori Yendo.
- グミの根瘤菌……Tetramyxa Elaegnii, Y. Yendo, sp. nov.

- 一、粘菌の寄生による桑樹の一新病害 (今村良郷) 二卷一號 (一九三〇)
- 一、桑に發生する菌類の一新種に就て (高瀬毅一) 四卷一號 (一九三三)
- 一、桑葉上の黄粉菌新種に就て (今村良郷) 五卷二號 (一九三三)
- 一、桑の赤衣病菌 (高瀬毅一) 六卷三號 (一九三五)
- 一、桑の擬似胴枯病菌 (高瀬毅一) 四卷三號 (一九三三)
- 一、植物のグイラス病七卷三號 (一九三五)
- 一、絹絲の青斑と其の原因 (倉澤恒夫) 八卷一號 (一九三五)
- 一、桑樹グイラス病の研究 (倉澤恒夫) 卷號 (一九三〇)

- 一、桑樹のグイラス病に關する研究 (其の二) 卷號 (一九三五)
- 一、富山縣下に發生せる桑樹の萎黄病に就て (原利夫) 卷號 (一九三〇)
- 一、桑の夏芽枯病に就て 卷號 (一九三〇)
- 一、桑樹のグイラス病に關する研究 (其の三) 卷號 (一九三〇)
- 一、桑樹のグイラス病に關する研究 (其の二) 卷號 (一九三五)
- 一、植物注射に關する研究
- 一、絹絲の褐色化に關する研究

御 挨拶

謹呈 陽春の候益々御清穆の段奉賀候
陳者 廷生儀 上田蠶絲專門學校奉職中は公私に亘り格別の御高擧と
御懇情とに預り半世を有意義に且つ愉快に過ごし得たることを感
謝罷在り候處今般俄に退官歸郷の餘儀なきに至り實に後髪を引か
るゝ思ひに有之候今後は此の越路の片田舎に於て自然を友に餘生
を送り度き決心に御座候が何卒御見捨なく相變らずの御交誼を賜
り度奉願願候

先は御挨拶申上げ度如斯御座候

敬具

昭和十六年四月八日

新潟縣三島郡深才村字福田

遠 藤 保 太 郎

叙任辭令

- 現職員之部
- 上田蠶絲專門學校教授 遠藤 保太郎
 - 從四位勳四等 上田蠶絲專門學校助教授 小松 忠一郎
 - 任上田蠶絲專門學校教授 阿久澤 清
 - 任上田蠶絲專門學校助教授 阿久澤 清
 - 給五級俸(以上三月二十九日)
 - 賜一級俸 依願免本官 遠藤 保太郎
 - 上田蠶絲專門學校教授 林 貞三
 - 六級俸下賜 羽鳥 不二夫
 - 十級俸下賜 上田蠶絲專門學校助教授 小川 朋次郎
 - 給五級俸 上田蠶絲專門學校助教授 阿久澤 清
 - 依願免本官
- 卒業生之部
- 上田蠶絲專門學校助教授 細川 豊
 - 依願免本官 上田蠶絲專門學校助手 内藤 榮吉
 - 給二級俸(以上三月三十一日) 倉澤 美徳
 - 上田蠶絲專門學校教授 倉澤 美徳
 - 任上田蠶絲專門學校助教授 倉澤 美徳
 - 任經濟部技士、被薦任三等 (本間 茂 鋭)
 - 任經濟部技佐、被薦任三等 (康徳七年十二月二十日) 木山 勝 雄
 - 朝鮮總督府郡守 三級俸下賜(十五年十二月二十八日) 木山 勝 雄
 - 栃木縣立宇都宮農學校教諭 糟谷 達三樓
 - 公立實業學校教諭 任ス、高等官七等特選 宇都宮農學校教諭 補ス(三月四日) 福谷 朝太郎
 - 朝鮮公立實業學校教諭 福谷 朝太郎
 - 六級俸下賜(十五年十二月二十八日) 宮島 庄平
 - 七級俸下賜(十五年九月三十日) 山形 新太郎
 - 群馬縣農林技師 任ス、高等官七等特選 地方農林技師 任ス、高等官七等特選 群馬縣農林技師 任ス、被薦任七位(三月八日) 願ニ依リ本職ヲ免ス(三月十日)

細川助教教授榮轉

纖維化學科の細川助教教授は突然日本人造羊毛株式會社に榮轉されることとなつた。同助教教授は昭和七年本校蠶絲科卒業以來、纖維化學科の前身蠶絲化學教室副手として絹絲化學、人造纖維等の研究に従事、昭和九年に講師となり、化学實驗を擔任、昭和十五年纖維化學科の増設に依つて助教教授となり、纖維作物學、化學、同實驗を擔任され、尙報國團のスキー山岳班長を勤められてゐた。今後益々御發展を祈る次第である。

細川助教教授を送る

輿 正 巳

新設の我が纖維化學教室から細川助教教授を送らねばならなくなつた。教員の増員を願ひこそすれ、今此の時期に有力なる同君を我が教室から失ふことは、ひとり纖維化學教室の損失であるのみならず、延いては當校の大なる傷手である。三月に入つてから話は急轉直下して日本人造羊毛株式會社から入社を懇望となつたわけである。

細川助教教授は昭和七年三月當校蠶絲科の出身である。生れは地元で出身中學も地元の上田中學、蠶絲専門學校を出てから直ちに絹絲化學教室に入つて、井上柳橋先生の下で滿洲柞蠶絲の利用に關する研究を手傳つたのが抑々化學に身を投ずるやうになつた最初の因縁である。生來化學は好きであつたことは勿論である。

昭和八年四月に副手を拜命し、井上博士の下で再生絹絲製造の研究に従事し、人造絹絲の製造も實習した。之が同君の人造絹絲に甚だ興味を持つに至つた動機であらう。

次いで昭和九年三月に講師職となり製絲紡織科一年の化學實驗を擔當し、その傍ら次の諸項目に就て研究を進めて行つた。

- 一、絹のアミノ酸組成に關する研究
 - 二、人造絹絲製造研究
 - 三、キチン纖維製造に關する研究
 - 四、菌毛羽の擬毛化に關する研究
 - 五、蠶蛹よりマギーンソス製造に關する研究
- 等、而して支那事變一度び起るや昭和十二年十月末教育の身に在り乍ら應召を受けて市川高射砲隊に入り猛烈なる軍隊訓練を受けるに至つた。元來餘り丈夫でなかつた同君も此の軍隊訓練は相當に心身の鍛練となつて、除隊後の研究の粘りに一役を果すに至つたことは勿論である。

昭和十三年四月に召集解除となつた折しも筆者は職を當校に奉じ細川君と室を同じくするに至つた。余に取つては學校内の同じく役として萬事御厄介になつた、そして研究事項も共同にやることになつた。それは大豆並に落花生蛋白質の人造纖維製造研究である。日本人造羊毛株式會社からの委嘱研究である。爾今二年有半、幸ひにも細川助教教授の異常の頑張りと精進によつて大豆蛋白質人造纖維は一躍他の製品を凌駕するに至つた。落花生蛋白質の如きは副産物的の研究であつたとは云へ、優に二g/dの強力のものを得るやうになつた。大豆纖維も一、五g/dの強力を得るに至つた。かく短日月の間に近歩し得たのは以前に井上博士の下で再生絹絲の研究をやつた賜物と思ふ。

纖維化學科の新設成れる昭和十五年の七月に助教教授に榮進し、同時に二、三新らしい授業科目も擔任し、纖維化學科一年生の親しい先生として慈兄の如く慕はれてゐたのである。今は休暇中であるが若しも學生が新學年に歸つて來たらどんなに驚き落膽することであらう。か過去二年有半の大巨蛋白質纖維の研究が實驗室的に實を結んで、日本人造羊毛の招聘に應じて獨特の技術をもつて入社されることになつたのである。同社は九州大分市に在る

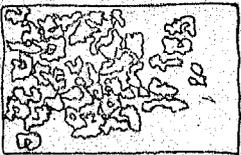
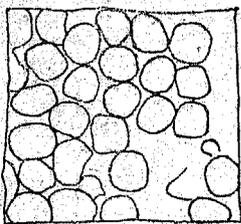
人絹會社で、人絹、人織の製造の外に菅パルプ製造で有名である。否それよりも金光厚生大臣の社長たりしところと言ふ方が知れ亘つてゐるかも知れぬ。さて細川助教教授の私生活の方に少し觸れよう。同君には一人の慈母があり、幼時より眼の中に入れても傷くない迄に付き切りに愛撫して來られた。併し昭和十四年の五月に結婚されて今は御曹子を設けて立派に國民の第一義務を果しつゝある。

同君は上田以外の土地での生活は初めてである。郷里の冬季の寒さに比して大分市は全く暖國である。殊に天下に有名な別府温泉の隣り合はせてある。スキーの快味は味へなくて新鮮なる海の幸もあることであらう。現下纖維工業界の原料價値の折、幸ひにも滿洲にうなる大豆の蛋白質人造纖維の製造に關する特技を以つて實際工業界に入らんとする同君の將來に期待するや甚だ切なるものがある。君未だ春秋に富む廿一歳と云へばこれから廿年間が華々しい研究生涯だ。乞ふ自重自愛せられてただに我校の名譽を發揮せらるるのみならず、邦家纖維工業の爲に偉大なる貢獻をされん事を。(四月三日脱稿)

テューボン氏の "Fiber-D" の發表

レイヨン・テクスタイル・モンスリー 一九四一、一ヨリ

テューボン氏の人絹部で同氏の實驗室で作られたファイバードをヴァイスコース法に依るステイプルファイバードの新製品として發表してゐる。羊毛との混紡用のファイバードとして特徴あるものを二年位前に作つた事がある。之はCh.Marlardに依つて一九三七年の十月十一月號のRayon, E.M. D(種々なる纖維の汚染度)と云ふ論文で指摘されてゐる。その論文には次の様な事が述べられてゐる「ファイバードに汚染度の低いものは主として直径が充分に大きく即ち、二七ミクロン以上で横断面に彎曲が少ない滑らかなものである」と。



Fiber-D 製品

公立實業學校教諭 平石 兵衛
新潟縣立加茂農林學校教諭 補(三月廿日)
正六位勲六等 鍵谷 傳
正六位 久保田 正樹
同 中島 茂
正六位勲六等 芝 莞雄
從五位 花岡 作彌
從六位(以上二月一日)
敍正六位(以上二月一日)

本校辭令

願ニ依リ副手ヲ免ス(三月十三日) 國島 正
願ニ依リ副手ヲ免シ講師職ヲ解ク(三月十八日) 市村 尙文
願ニ依リ副手ヲ免ス(三月二十二日) 藤野 正三
願ニ依リ臨時副手ヲ免ス 工藤 榮次
願ニ依リ臨時副手ヲ免ス 富永 暉
願ニ依リ副手ヲ免ス(以上三月三十一日) 小縣 實
小縣實業學校教諭心得 高野 安次
學生銃劍術實地指導ヲ囑託ス(四月一日) 瀧澤 留吉
雇ヲ命ス 養蠶科勤務ヲ命ス(四月四日)

此の二つの類微鏡寫真でも解る様にその横断面が非常に圓滑である。此の二つの寫真は普通のファイバーの横断面と比較して見たるものである。此のファイバーDから作られたる織物は塵や汚れが洗ひ落し易いと云ふ特徴を持つてゐる。ファイバーDは十、十五、二十、二十五、三十デニール作られ粗織紗、絨氈敷物、室内裝飾品や壁掛け、絹織ビロード、その他ほこりの吸ひ易い織物には理想的である。之は非常に驚くべき事である。C.H. Maslandにも認められてゐる。此の種の織物製造家には一考を要すべきもので勿論宣傳價值も充分にある。

重大なる要素縮絨について

縮絨とは繊維の長さの方向に生ずる波であつて、上等なオーストリア羊毛の特徴として良く知られてゐる。縮絨は絲や製品の高を増し柔軟とならしめる。ファイバーDに於ても縮絨はその獨特の特徴である。羊毛の縮絨についてはアメリカカンウールハンドブックに於てズルナーは次の様に述べてゐる「種々なる羊毛に於てその波の数は羊毛の品質に多少なりとも影響するものであつて、通常其の縮絨が多ければ多い程羊毛の品質は良くなる」又Bassは縮絨は羊毛の品質を性質に加へてゐる。そして又此の縮絨はハンドリングやプロセッシングする間に多少消へても簡單なる處理によつて容易に元に戻す事が出来る。此の様

な事は初期のカーネルされたレーヨンの縮絨がたやすく消へて失つた様なものとBiber'sの根本的に違ふ點である。ファイバーDの縮絨はハンドリングによつて出来上つた製品の手觸りや、保温力に於て羊毛とは殆んど變らない、外觀を共へると云ふ事は疑ふ餘地の無い事である。勿論Biber'sも人絹であるので直射光線では染色されたものは光澤に富み鮮明である。此の事は絨氈製造家にとつては非常に注意深く撰られた高價な白い羊毛を使ふ以外は、過去に於ては光澤を出す事が至難とされて來た事を考へればBiber'sを使へば汚染度が少なくて鮮明な色で而も何時迄も色の

あせない美しい絨氈や敷物を作る事が容易に出来るわけである。

一般にBiber'sレーヨンと同様に光澤も半光澤ダールの等を作れば更に廣い範圍迄粗織絨製造家や加工業者者に利用される事となる。更に短繊維から作つた絲はその光澤や手觸りから作つたビロード類は透明で毛根立ちも良くする事が出来る。

又一方Fray's Tunitにより本誌一九四〇年一、二月號に於て述べられた様に他の非常に優れた點は、粗織紗用羊毛が出荷の不同滑で需要供給や經濟狀勢で價格の變動の激しいのに比してレーヨンの價格の安定してゐる點である。之はひとり品質や意匠の點のみならず、業者が要望する様な價格の點に於ても製品の價格を安定せしめる上に非常に役立つであらう。

他の利點

尙Biber'sは以上述べ來つた事許りでなくこれから織られた製品の性質が需要者の豫期以上に羊毛織物と此して優れた根本的な改良が加へられてゐる事である。即ちデューボンの「ゼラン」と云ふ仕上行程を行つたものは上等な羊毛から作られた織物とは殆んど區別がつかない程柔らかな手觸りをしてゐる。又斯様な敷物や壁掛け類は自然に防中性で防濕性、防火性等の處理も簡單に施せる。

デューボンの此の發表で特に次の様な事を述べてゐる、即ち圓いなめらかな横断面はデックロン氏が、デックロンの商標で賣出し、この織物とは同系統のものではあるが、デックロンの特許とは關係ない。以上の様なわけでBiber'sは特に厚手織物としてレーヨンの法のステープルファイバーに新用途を與へると云ふ事は疑ひのない事である。

第廿八回 卒業證書授與式

三月十五日午前十一時より母校講堂に於て第廿八回卒業證書授與式が來賓並に父兄多數の參列を得て舉行された。

式は宮城逸輝、英靈に感謝、皇軍武運長久、麒麟に始まり、各科卒業、修業者氏名呼稱し各科總代(養蠶科内明君、製絲科宮田章君、絹紡織科瀧澤今朝教君)に夫々校長より證書を授與、尙本年は特に實業教育振興會中央會の表彰状が中島滿展君(紡卒)に、又針探茅野矩雄君、絹紡織科中島滿展君)に授與、文部大臣祝辭(大瀧教授代讀)、來賓より鈴木長野縣知事(森本蠶絲課技術師代讀)、淺井上田市長(小林市會議長代讀)、實業家代表成澤伍一郎氏、中等學校代表白田上田高等女學校校長、同窓會代表唐木田藤五郎氏等の處世訓を交へた祝辭があり、引續きつ祝電披露、在校生總代小林武志君(蠶)の辭があり、對して卒業生總代内明君(蠶)の答辭があり、最後に校歌を合唱して此の意義ある式典を閉じた。それより審判とお茶の懇親會があつた。

井上校長の告辭

本日茲に當校第二十八回卒業證書授與式を舉行スルニ當リ、文部大臣閣下より祝辭ヲ賜リ且つ朝野貴賓各位ノ貴臨ヲ辱フシタルハ、本校ノ光榮トスル所ナリ。本日卒業生ニ修業證書ヲ授與セルレバキモノハ、
養蠶科 三十九名
製絲科 二十八名
絹紡織科 二十八名
製絲教習養成科 四十一名
合計 百十名
諸子ハ入學以來能ク校規ヲ守リ校訓ニ從ヒ奮勵努力シタル結果、今日ノ榮冠ヲ獲ルニ到

レルモノニシテ、諸子ノ父兄ト共ニ歡喜ニ堪ヘザル處ナリ。今ヤ日支事變ハ第五年ヲ迎ヘ、我國ハ陛下ノ御威威ノモト陸海軍將士ノ万難ヲ排シテ奮戰力闘ノ結果、多大ノ戰果ヲ收メ重要ナル地域ハ已ニ我掌中ニアリ。而シテ新中央政府ハ設立セラレ治安ハ大ニ回復セラレ、アルモ、尙ホ將政權ハ餘喘ヲ保チツ、アリ、時ニ附煙天ノ蔽ヒ、劍光月ニ染キアリ加フルニ歐洲ノ戰亂ハ益々擴大シ、日米ノ關係ハ日ニ險惡ヲ傳ヘテ太平洋ノ波濤益々高キヲ加ヘントス。

此秋ニ瀝リテ諸子ハ學窓ヲ出テ將ニ活社會ニ出テントス。諸子ハ世界ノ情勢ヲ遠觀シ日本國民タルノ氣宇ト、識見トヲ養ヒ、躍進日本ノ中核トナリ、大東亞新建設ヲ目指シ百折不撓ノ氣魄ヲ振起シ、試練ニ耐ヘテ自強息マザルノ努力ヲ盡シ、道ニ從ツテ中正ヲ失ハズ事ニ當リテ滅私奉公各各自ノ職分ヲ通ジテ盡忠報國ノ至誠ヲ輸サルベカラズ。

方今我國織維工業界ニ於テハ時局ノ影響ヲ受ケ原料減少ノ憂、生産激減シタル窮地ニアラモノ多シ。我蠶絲業ハ緊迫化シタル國際情勢ノアラユル場合ニ處シテ安定ヲ期セザルニシテ蠶絲業統制法ノ制定ニヨリ、海外依存ヨリ離脱シ、内需ニ轉換シテ是等不足セル織維ヲ補ヒ是等ノ織維ト混動シテ是等ヲ優秀ナラシメント爲シツ、アリ、即チ現下ハ蠶絲業ノ一大轉換期ニシテ技術者ノ最モ活躍スベキ絶好ノ機會ナリ。斯業ニ關スル專門ノ學術ヲ修メ活氣横溢セル諸子ノ爲メニ慶賀ニ堪ヘザル處ナリ。

諸子宜ツク進テ難局ニ當リ、苦境打開ノ先驅ヲ以テ任シ奮勵努力シテ國家ガ諸子ヲ養成シタル報恩ノ實ヲ舉ゲザルベカラズ。終ニ臨ミ諸子ト別レ、ニ當リ一昔セントス社會ハ進轉シテ寸時モ止ムコトナク科學ノ進歩ハ日ニ新ナリ、諸子ハ我校ニ於テ修得シタル所ヲ基礎トシテ絶ヘズ研鑽ヲ重シ、修養ヲ怠ルコトナク學識ヲ廣メ人格ノ向上ヲ志シ、創作性ヲ發揮シ、進歩ニ貢獻シ以テ國家ガ爲メ材トナラントヲ志ルベカラズ。斯ノ如クシテ諸子ハ國家ガ諸子ヲ養成シタル主旨ニ酬ユルヲ得ベク又以テ社會ノ期待ニ添ヒ得ルコトト信ズ。

技ニ諸子ノ前途ヲ祝福シ、成功ヲ祈ル。

昭和十六年度

入學許可者氏名

五十音順、○印ハ無試験檢定入學者

養蠶科(三十七名)

Table listing names of students in the Sericulture Department (養蠶科) and other departments, organized by 50-sound order. Includes names like 熊川河合片春大田小岡岡梅村岩見相澤, etc.

入學試験問題

昭和十六年度

數學

- 1. 等比級數ヲナス三數アリ。其和ハ35ナリ。而シテ各數ヨリ夫々1,2,8ヲ減ズレバ等差級數ヲナスト云フ。三數如何。
2. 半徑Rナル圓外ノ一點ヨリ此圓ヘ引ケル切線ハ此點ヨリ圓周ニ至ル最短距離ノ二倍ニ等シト云フ。此點ト圓ノ中心トノ距離ヲ求ム。
3. 次ノ式ノ近似値ヲ小數第三位マデ求メヨ。
4. 次ノ聯立方程式ヲ解ケ。
5. 次ノ方程式ヲ解ケ。

國史

- (一) 皇國の大使命を歴史的事實上に據りて闡明せよ。
(二) 日支交渉上重要なる事象を年代順に概説せよ。

國語

- 一、次ノ文ヲ解釋セヨ
二、奈良佛教の時代に人々が佛教の藝術的印象から法悦を感じたらしいことは、さまざまの證據から確言することが出来る。既に佛教渡來時に於て佛教受容を決定せしめたものは佛像の興へた美的印象であつたと傳へられてゐるが、その後の佛教受容の努力は、佛教哲學の理解の仕事を除いては、主として造形美術の創作であつた。かゝる創作がそれを受用する相手なしに行はれたといふ様なことは、藝術の社會的意義を否定しない限り言ひ得ぬことであらう。さうしてこの受用こそはまさに藝術的法悦にほかならぬ。

上記ノ文ニ即シテ次ノ問ニ答ヘヨ

- (イ) 造形美術ノ創作ガ行ハレタノハ如何ナル理由ニ基クカ。
(ロ) 藝術ノ社會的意義トハ如何ナルコトカ
三、次ノ文ノ主眼點ヲ指摘シ且ソノ意味ヲ究明セヨ
四、次ノ文中ニアル片假名ノ語ヲ漢字ニテ記セ

化學

- (1) 炭酸石灰に1規定硫酸100c.c.を加へて得らるべき炭酸瓦斯は溫度21度壓力756m.m.の状態に於て幾c.c.なるか。但硫酸の分子量は98とす(答は小數第二位以下切捨のこと)
(2) 弱鹽基と強酸とより成る正鹽又は強鹽基と弱酸とより成る正鹽を水に溶解するときは如何なる化學的變化を生ずるか各一例につきて説明せよ。
(3) 次の諸問を説明せよ
(4) アルデーヒド,エーテルエステル,炭火水素,炭水化合物中につきて各一例を挙げ且其分子式を記せ

本會記事

本會日誌

三月八日 新入會員の歓迎會を行ふ
三月十二日 故中島精一氏の葬儀執行せらるる
倉澤理事會葬せり
三月十三日 入學試験官出張に付關係支會長
に依頼狀發送す
三月二十六日 會報第三號の出版届提出す
三月二十七日 會報第四號より出版手續省略
提出す
三月二十九日 遠藤先生並に同窓細川、阿久
澤兩氏の送別會を行ふ
三月三十日 佐谷戸健次郎氏(蠶一)の葬儀執
行せらるる浦生理理事長會葬せり
四月二日 柏合豊吉氏(蠶九)春秋逝去せられ
し趣通知あり弔詞を發す

統後資金應募者

- 頭書ニ1、トアルハ第一回離出者
2、トアルハ第二回離出者
3、トアルハ第三回離出者
1 金貳圓也 原田 兵衛
2 金貳圓也 上野 榮仁
3 金貳圓也 内藤 良雄
1 金貳圓也 荒木 喬
1 金貳圓也 宮前 邦雄
1 金壹圓也 山下 忠雄
1 金壹圓也 入佐 一郎
1 金壹圓也 清水 英人
1 金壹圓也 田口 敏夫
1 金壹圓也 中島 敏夫
1 金壹圓也 坂口 孝保
1 金壹圓也 内海 弘
1 金壹圓也 右合計金四拾參圓也
累計 金壹千百拾八圓也

會費領收

昭和十五年會費金四圓也
芝 荒雄(蠶二) 木脇 寅熊(蠶四)

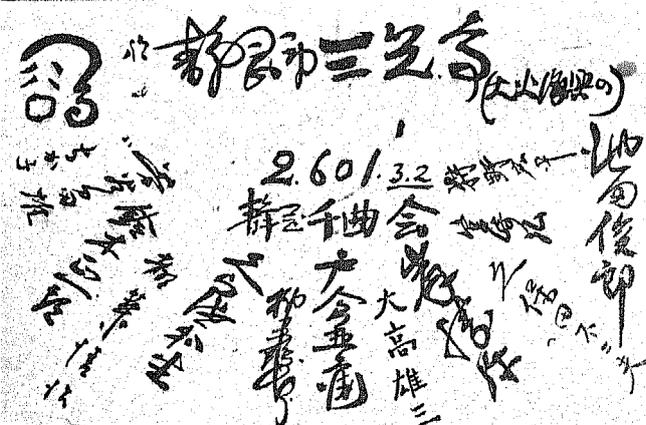
入會金完納者

- 岩根 謙(蠶二) 宮本 豊彦(蠶五)
岩根 晋(蠶五) 坂口 孝保(蠶七)
岩根 巖(蠶九) 池田 俊郎(蠶三)
岩根 深(蠶三) 伊藤 幸男(蠶三)
岩根 護(蠶三) 竹内 好武(蠶三)
香山 清(蠶五) 立本 彰(蠶三)
宮坂 三郎(蠶三) 立本 一千(蠶三)
山崎 勝巳(蠶三) 竹下 清(蠶五)
萩原 和夫(蠶五) 工藤 榮次(蠶五)
竹下 清(蠶五) 金 潤植(蠶五)
小泉 沈雄(蠶五) 高橋 通(蠶五)
田中 製装平(蠶五) 松尾 卓見(蠶五)
水口 米雄(蠶五) 村瀬 益雄(蠶五)
井上 次郎(蠶五) 小林 義八(蠶五)
篠田 鏡一(蠶五) 須藤 隆二(蠶五)
諏訪 幾久男(蠶五) 武井 順太郎(蠶五)
田野 實哲雄(蠶五) 中川 督一郎(蠶五)
島田 重夫(蠶五) 松島 眞雄(蠶五)
宮田 章(蠶五) 安岡 眞美(蠶五)
藥師 寺宏吉(蠶五) 岡田 幸一(蠶五)
内田 浩(蠶五) 藤井 勳(蠶五)
上島 喜代志(蠶五) 藤井 和夫(蠶五)
土屋 登(蠶五) 武井 勳(蠶五)
柴田 市郎(蠶五) 早野 嘉人(蠶五)
根岸 聰夫(蠶五) 宮村 賢(蠶五)
終身會費完納者
井上 次郎(蠶五) 小林 義八(蠶五)
武井 順太郎(蠶五) 中澤 治(蠶五)
根岸 市郎(蠶五)
未納會費納入者
金拾貳圓也(昭和十五年度分)近藤 正巳(蠶三)
金拾六圓也(昭和十五年度分)芝 荒雄(蠶二)
金拾七圓也(昭和十五年度分)桑村 壽命(蠶五)
金拾四圓也(昭和十五年度分)中島 茂司(蠶五)
金拾拾七圓也(昭和十五年度分)木内 保平(蠶三)
金八圓也(昭和十五年度分)青木 永次郎(蠶三)
金四圓也(昭和九年度分)味澤 泰造(蠶五)
金拾貳圓也(昭和十五年度分)立木 一千(蠶三)

支會通信

静岡千曲會の記

高嶺の雪も消えやらせて、春猶淺き東海の、
松の緑に彌榮へ、白帆三つ四つ海原に舞けき
春の微風を胸に抱きて帆を孕み、白鷗の群。
碧波にたわむる。
春。春。皇紀二千六百年の春。何も彼も
新發足の春なり。
三月二日(日)。復興新發足の楳の音高き駿
府城下。新裝成つた三笑亭にて、静岡千曲會
第六回總會開催、本部より倉澤理事御來臨と
の報に、一同斷然張り切つて、東西より馳せ
集る。
この日、小雨ちらつきて薄ら寒きを思はせ
ど、左程危ぶまるゝとは思はれじ。



御挨拶

謹啓春暖の候愈々御清穆之段奉賀候
陳者私儀宮城縣小牛田農林學校在職
中は公私共格別なる御厚情に預り難
有厚く御禮申上候
今般長野縣上伊那郡伊北農商學校に
勤務致すことに相成候に就ては一層
の御指導御鞭撻を賜り度奉懇願候
右不取敢御禮旁々御挨拶迄如斯御座
候
昭和十六年四月十日
長野縣上伊那郡伊那富村宮本
遠山正壽

同窓會。同窓會とは同じ窓より顔を出せし
もの集ひ、初顔の者も舊知の如く、微塵の
遺慮たに無し、來會の而々、寄書通りの自稱
他稱録々たるメンバーなり。斷つて置か
人の女性のは、蠶者に非ずして新婦新發足の
誰かが會長の命のまゝ、敢へて記せしなり。
倉澤理事の例の美秀は愈光澤を増して、會
場を天照す。例によつてその有意義なるお話
に各新知識を息吹きし衷心喜ばしむるところ
あり。
やがて午後五時ともなれば、好むと好まざ
るに拘らず、齊しく茶椀は杯に變り、月會會
長、岸大人以下續つたものは、いづれも上田
仕込みの猛者揃ひ、上下なく巡る統制品の逸
物に春宵の値千金と、何とか言ふ詩人の吟じ
たるに共鳴せり。
和氣満堂、信濃路の學びの舍に育くまれし
青春時代の想ひ出に、名残盡きせぬを惜しみ
つゝ感激と興奮の裡に、嬉しき一夜を樂しみ
ぬ。斯くて年に一度の大顔合せは終りぬ。
又來年だ。來年と云へば笑はせ鬼も笑へ、
兎に角來年だ。
終りに、御多忙中御繰合せ下すつて、御臨
席を辱ふせし倉澤理事の御厚意を謝し併せて
出征會員の御武運長久を祈る。
我等は益々、和衷協力、職域奉公、我が千
曲會の繁榮に努力せん。(芳谷昭)

朝鮮春の便り

○連翹奮ゆるみて春淺し

陽春彌生も下旬となり黄ばみがかつた連翹の蕾も一日とふくらみ早春とは云ふもの、未だ春淺く相當肌寒さを感ずる。三寒四温の永い冬眠生活より開放されやれ、と背のびをし柳の青味に花への歩みを知るとは云え朝晩はうすら寒くまだ温突のぬくみが懐しい。朝鮮早春の便りも此處京城南山の麓は喜久廻の二階から簡単に御傳へすることにす。

○南山の献燈まはらに春寒し

半島蠶絲業界味會の大會議が三月二十四日より四日間總督府に於て開催さる、と聞けば誰れしも朗になる。無慮六十餘名の人材共がズラリと整列、然して此れからの半島蠶絲業の進路は此より外に路なしと、曰く現在の統制を益々強化し計畫生産を實行し内地依存より脱脚し半島獨自の方法で云々……と大きな處を開かしていたその細目に至つては追つて發表するで會議は一先づ閉幕。

六十名の戦士中には新舊とリませ同窓も澤山居る。年に一度の會合だ、一杯飲もう、昨今銘酒は一寸手に入らぬがのつもりで若干水臭くとも我慢するさ、それでも酔はれる御人もあるとはさて、時局的な人も數の中には居られる先づ以て目出度し。歡談盡くるを知らず、和氣藹々裡に早春の一夜に名残りを惜しみ十時夫々御得意の穴に入る。

○小川邊の磁露淡く猫柳

宵夜の出席者を科別に御照會しよふ。開會に先だち前會長矢澤技師には御敬父御逝去御歸郷中の爲め一同謹みて哀悼の意を表し遙に御冥福を御祈り申上ぐ。

△養蠶科

北澤、尾見、藤崎、後藤、中村、市川、矢島、宮本、新井、伊東、香山、木内の十二名、此の組は何れも官界人のみであり、禿頭燦然たる北澤、尾見の兩技師のもとに統

卒せられ近々新體制にとものふ新技師に御榮進せらるゝだろう。候補者三、四名居り春風胎動たるものあり金くらちやましき限りなり、切に御自重を祈る。

△製絲科

太田、牧野、林、藤井、原田、戸田、御子柴の七名は實業界人にして夫々の地位に居られ御活躍中、残り關、内藤、油井、大石伊藤、市村の六名は官界人、此の組は過去に於ては文字通り秋風落葉の感ありしも今や黎明光を放ち綠なす地平線の彼處に浮び上り將に跳躍せんとしてゐる。其の内惠まる、時もあり以て瞑すべし。

△紡績科

此の組は甚だ心淋しく實業界の笠原氏唯一人。

○摘算や離はりあけて雲一つ

以上京城組を合算し總勢二十六名參集の盛況、プログラムの藤井、伊藤兩氏の斡旋により準備萬端手ぬかりなく豫定通り進行、宴なかばにして朝鮮千曲會互助規約第〇條に藤崎牧野兩氏はいとも仲睦まじく該當者としての光榮を負ひ、即金十圓御寄進の餘興等あり今席に御出席なき他の該當者の方も須らく斯くありたし、當日の美譽として出席者一同の賞讃をばくしたりしことを特に附記し御參考に供す。

○紅梅や一輪づゝの咲かざ

早春肌寒いと云ひ紅梅の一輪開く毎に春は深まる、やがて櫻も咲き桑の芽もふくらむ非常時とは云へ春ともなれば心も浮き、すの新體制下の蠶戦は將に火蓋を切るうとしてゐる。苦難の過去十數年をきつぱりと精算し此れから新しきスタートを切らんとする吾々蠶人は心氣一轉奮進すべきではなかるうか。苗さす夕陽は凋落であり黎明は生氣潑刺たる躍動を意見す。更生せる姿の業界は天下に其の第一聲を叫ばんとしてゐる、世の職者よ老ひも若きも覺悟新たなるものありや。

(三、二七記)

軍隊生活断片

絲二六 破帽生

學校を出て背廣の感觸を樂しみながら朝夕研究所の門をくぐり、エンジンの爆音とターター毎日を送り、プロットのカーブに無限の喜びを感じ、宇宙の眞理を今日も一つ發見したワイといふ、氣になつて銀座を闊歩し、シニトラウスを聴きヘツセの青春彷徨を熱讀して我が春を謳歌して居た。今から考へると實に「タルンテ」ゐた次第である。

一昨年の八月検査の結果甲種合格となつて嬉しかつた。とうとう俺も兵隊だ、一つしつかり頑張つてこようと悲壯なる決心をしたのである。昨年の〇月〇日、第〇航空教育隊に入營した。

グラス、メイトの多くが僕と同じ様に毎朝の起床ラッパでペソをかいて居る？事と思ふと、ほ、へましくなる。眼が覺める迄は修己寮の萬年床の中でグラスコヤやつてゐる様な氣であるが、ラッパが鳴るとイケネー此處は軍隊ぢやワイと思ひ出す。

東京の近くに居たものだから日曜日には大抵東京へ出て山岸や宮田や河野、外城さん等の家へ遊びに行つた。實際友人のアパートへ行くとき全くだまらなくなる。和やかな空氣がたまらなくなる、皆の親切が身にしみ涙の出る程嬉しくなる。期らかな友人達の談笑がたまらなくなる。兵隊になると部屋に總ての物が別世界の此の上もなく美しい物に感じられてならない。兵隊の生活は確かに修養になると思ふ、肉體も精神も健全になる事は確かだ。ヘツセの

「旅する心」を讀む、下宿から朝夕よく眺めた美しい雲を思ひ出す。寮の櫻が夕日に照らされてホロ／＼散つてゐる絶景を思ひ出す。帝都電車沿線の美しい景色を思ひ出す。寮の萬年床の中で聞いたカツコウ鳥の鳴聲を思ひ出す。(今でも鳴いてゐるだらうか)

陸軍〇〇學校を終へ、ピワ湖のすぐ近くの日航空隊にやつて来た。爆音に明け、爆音に暮れる、毎日である。日中の訓練は猛烈だけれど其の他は至極呑氣である。人間がナマにならないう様努めて勉強してゐる。

此の間彦根のグラス、メイトM君の所へ遊びに行つたら同じ會社のT氏(先輩)が地方の生活がいかに苦しいかと云ふ事を色々話してくれて、軍隊の方がいゝですよと言つてくれた。人間で養澤な者だと思つた。

軍隊へ来て健全なる精神と健全なる身體とを得る事が出来たらそれで充分である。ナポレオンぢやないが「不可能なし」と云ふ確心を掴む事が出来たらそれで充分である。僕はメンコの飯を食つた奴は幸福な奴だと思ふ。自分も幸福だと思つてゐる。今度社會に出た時、此の精神と此の肉體と此の腕で、俺達はすばらしい仕事を成し遂げられるぞと云ふ様な氣がしてならない。

寮に居た時分、同じ部屋で一語に尻を燃して喜んでた橋本正太郎君、鈴木彦彦君、森三郎君は今どこで何してゐるのかな一時に手紙でもくれないかな一時報を何處かで見たら一つ頼むぜ。それから黒川君の所屬部隊も解らなくなつたが或は野戦にでも行つたのかと思つてゐる。黒川君も本誌を見た手紙を頼むぜ。

(三月十三日夜)

會員動靜 (四月十一日)

石倉新十郎 (現職) (勤)從前通(住)上田市上常田六八八橫澤敏井方
遠藤保太郎 (現職) 新潟縣三島郡深才村大字福田一(番戶)
千葉三郎 (現職) 中外化學工業株式會社(東京市王子區袋町一ノ一五三四)
佐谷戶健次郎 (現職) (勤)從前通(住)靜岡縣沼津市住吉町三四七
昭和一六三、二五死亡、嗣子、佐谷戶利雄(長野縣下高井郡中野町東町)

依田武治 (絲二九) (勤)ナシ(住)從前通(青森縣農業試驗場前檢定係(上北郡七月町))
清水重雄 (絲二〇) (勤)ナシ(住)長野縣下伊那郡市田村下市田七五
前田益藏 (絲二〇) (勤)從前通(住)上田市愛宕町四〇一
萩原清治 (絲二〇) 企對院第四部(住)從前通
富岡秀一 (絲一六) (住)新潟縣北魚沼郡小出町
柳澤榮一 (絲一七) 株式會社日立製作所、日立研究所(茨城縣日立市)
吉賀哲雄 (絲一八) 川西航空株式會社研究部風洞係(兵庫縣武庫郡鳴尾村)
西尾重雄 (絲一八) 室山製絲株式會社(三重縣三重郡四郷村)
四方藤雄 (絲一九) 那是製絲今市工場(鳥根縣蘇川郡出雲町)
須江辨三郎 (絲二〇) 川西航空株式會社研究部(兵庫縣武庫郡鳴尾村字大東一)
島田林助 (絲二〇) 全上
橫澤茂平 (絲二一) (住)上田市海野町
一之瀬茂 (絲二一) 日立製作所(茨城縣日立市)
清水英一 (絲二二) 山口縣農務課(山口市)(住)山口市後河原一五番地
埤山正克 (絲二二) 商工省橫濱輸出毛織物検査所足利支所(足利市線町二丁目)
田口清一 (絲二三) 本校製絲科
青木善次 (絲二三) 召集解除(勤)鐘紡高砂人絹工場(兵庫縣加工郡高砂町)
羽田滿 (絲二四) 全國製絲業聯合會(東京市龜町區有樂町一ノ七、蠶絲會館內)
土生瑛二 (絲二四) 丹倉、鹿兒島工場(鹿兒島市原良町一六五五)
井上正人 (絲二六) 本校纖維化學科
小川典二 (絲二六) 陸軍防空學校幹候隊一中隊三區隊(千葉市小仲臺町)
富永暉 (絲二六) 橫須賀海軍航空技術廠材料部第四科(橫須賀市浦郷)(住)橫濱市磯子町兼町一八
中島德健 (絲二六) 出雲製織石見人絹工場(島根縣高津町)
山岸清保 (絲二六) (住)東京市本所區橫綱九番地
阿久澤清 (絲二六) 橋製絲株式會社(埼玉縣本庄町)
岡崎喜熊 (絲二六) 滿洲國經濟部工務司(新京特別市)
本村善吉 (絲二六) (勤)從前通(住)金澤市臺所町七番丁一四番地
市村尙文 (絲二六) 群馬縣工業試驗場(前橋市岩神町)
竹內方榮 (絲二六) 審織維工業人織部島岡工場(大阪府三島郡島飼村)電話、茨木一三三番・二二番(自宅)兵庫縣伊丹市平松町四ノ八
佐久間幸一 (絲二〇) 〇月〇日召集解除(勤)吳紡績織工場(福島縣石城郡錦町)
星田馨 (絲二〇) 大日本紡績山崎工場(住)大阪府三島郡島本町大字山崎饅ヶ丘社宅

岩田正三 (紡一五) 滿洲國東安省二七〇部隊大橋隊
北澤茂樹 (紡一六) 召集解除(住)兵庫縣加古川町二四八
小島武明 (紡一七) 東洋レイヨン瀨田工場(滋賀縣栗太郡瀨田町)
東海林誠治 (紡一九) 商工省京都輸出絹織物検査所西ノ京支所(京都市中京區西大路三條上九)
佐藤かち (教二) 防空兵第八部隊
小林みよ (教二) (住)長野縣小縣郡鹽尻村秋和
渡邊きよ (教五) (住)長野縣小縣郡鹽尻村字田中
荻原さか (教七) (勤)ナシ(住)長野縣北佐久郡北御牧村布下
昭榮製絲株式會社(東京市日本橋區吳服橋三ノ七)(住)從前通

新卒業生就職先

(〇印ハ選科修業生)

養蠶科

秋馬 關正平 東化帝國大學理學部地質古生物學 九州帝國大學農學部(京都府綾部町) 朝鮮總督府農林局農産課蠶絲係(京都市) 長野縣相川中學校(新瀨縣佐渡郡相川町) 新瀨縣相川中學校(新瀨縣佐渡郡相川町)

農學科

尾崎 毅 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地)

理學科

高橋 道通 陸軍科學研究所(住)神奈川縣川崎市東生田二四九二吉川直次郎方 農林省蠶絲局蠶業課(東京市麹町區大手町)(住)東京市王子區東十條二ノ

農學科

田中 吉高 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地)

農學科

田中 吉高 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地)

製絲科

尾崎 毅 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地) 陸軍農學部(東京市杉並區馬橋四丁目四九九番地)

大日本染織株式會社(名古屋市中區光音寺町)

小川 義泰 日立航空機株式會社立川工場(東京府立川町) 日立航空機株式會社立川工場(東京府立川町) 日立航空機株式會社立川工場(東京府立川町) 日立航空機株式會社立川工場(東京府立川町) 日立航空機株式會社立川工場(東京府立川町)

絹紡織科

淺井 善右衛門 大日本紡績株式會社岐阜工場(岐阜市五坪町) 大日本紡績株式會社岐阜工場(岐阜市五坪町) 大日本紡績株式會社岐阜工場(岐阜市五坪町) 大日本紡績株式會社岐阜工場(岐阜市五坪町) 大日本紡績株式會社岐阜工場(岐阜市五坪町)

